第二代学部長 佐々木琢磨先生を偲んで

生体有機化学講座
田中 基裕

佐々木・松田両先生と
(1998年New Orleans Pharmacy Museum)

平成24年秋、奥様から佐々木琢磨先生が危篤との電話を受けた。その1か月前に、横沢英良、松田彰両先生と4人で、大いに痛飲した直後の知らせだけにただ驚くばかりでした。あれだけ元気で、終生現役を志しておられた先生が、72歳の若さで急性肺炎による他界とは、納得のいかない思いを持ったことが、つい昨日のことのように思い出されます。

先生との出会いは、昭和53年博士課程1年生で、国立がんセンター研究所化学療法部においてがん研究を志した時です。先生は、実験化学療法室長として「多糖類の抗腫瘍性とその作用機構」、「海洋生物からの抗腫瘍性物質の探索」の二本立ての研究をされていました。旧海軍兵学寮の建物を利用した研究所の4階にあった研究室は、スタッフの居室、実験室、動物室が兼用で、マウスと共に食事する劣悪な環境でした。その中で、30代後半の先生は、新しい抗がん剤を創るという目的のもと、限られたスタッフと共に「酒と研究の日々」を送られ、これが先生の弟子たちのエネルギーとなっていたと感じます。

昭和61年、先生は金沢大学がん研究所に移られ、「新規核酸代謝拮抗剤の開発研究」、「海洋生物由来抗がん物質探索研究」、現在のがん化学療法の主流となる「個別化医療を目指した抗がん剤感受性試験に関する研究」、などに積極的に取り組まれました。これらすべての研究に携わったことは、人生最大の喜びと今でも感じています。先生は、文科省、厚労省のがん重点領域研究の研究班長として、我が国のがん化学療法の基礎研究のリーダーシップを取られ、先生の開発された新たな作用機構を有する新規核酸代謝拮抗剤は、現在も臨床研究が進行中であり、先生の存命中に上市されなかったことが悔やまれます。

平成17年、金沢大学を退官後、新設の愛知学院大学薬学部で後進を育てる道を選択し、平成19年からは4年間薬学部長として、薬学部の礎を築くことに貢献されました。大学からは薬学部の発展のためにまだまだ働いてくれと要望されましたが、是々非々のお考えのもと定年と共に潔く身を引かれたことに大いに感銘を受けました。

先生は、「自分の置かれた環境で、その時その時の最善を尽くせ」とよく言われていた。この教えは、先生のもとで研究生活を行った多くの門下生の心に深く刻まれているものと信じています。先生から賜った御恩を充分にお返しできませんでしたが、30年以上にわたって教えていただいた人生観を、後輩に伝えていくことをお誓いします。先生どうぞ安らかにお眠りください。